

# 神戸山手大学における一般学生とシニア学生の関係

—— インタビュー調査の結果から ——

## A Study on the Relationship between Younger Students and older Students: A Case Study at Kobe-Yamate Univ.

行 木 敬  
飯 嶋 香 織

キーワード：生涯学習、シニア学生、神戸山手大学

### 要 旨

大学で学ぶシニア層が増えている。今後もその数が増加するならば、若い一般学生との関係構築や影響関係は、やがて重要な研究テーマとして浮上してくることだろう。

このような「生涯学習の推進が若者に及ぼす影響」は、「シニア50+」制度のもと多くのシニア層を受け入れてきた本学において、すでに無視できない大きさになっている。本研究は、本学の若い一般学生へのインタビューを通じ、シニア学生との関係構築の過程やその成否、またシニア学生から受けた影響やその受けとめ方を探るものである。

シニア学生との関係構築については、同じ学生であることと、年齢が違うこと、この二つの属性をどのような順序で使い分けるかが、成否の重要な鍵になっていることが明らかになった。シニア学生の影響については、学習支援や授業参加意欲の向上、同年代だけで固まった人間関係からの解放、そして上述した二つの属性の使い分けによる年上の人との付き合い方の習得などが、肯定的に受けとめられていることが明らかになった。

### 1. 研究の目的

神戸山手大学に「シニア50+」制度が設置されてから8年になる。2015年度は7名の入学生をむかえた。50歳以上のシニア層に対し、若い一般学生とまったく同じ4年間のカリキュラムを提供するこの試みは、毎年10人前後の入学者をコンスタントに集め続け、いまや本学の大きな特色のひとつとして定着している。

こうしたシニア学生について、筆者たちは、それを生涯学習の事例として位置づけ、調査・分析をおこなってきた。これまでにインタビュー調査をもとにした研究（飯嶋・行木 2013）、および質問紙調査に基づく研究（飯嶋・行木 2014）を発表している。これらの研究により、入学動機や入学後の印象、卒業後の進路、それらを総合した満足度、大学で学ぶ意義などについて、本学のシニア学生たちの考えは、ある程度明らかにできたと思われる。

その上で、さらなる関心として浮上したのが、若い学生の側の考えである。

以下本稿では、18歳で高校を卒業した後、間をおかずに大学に入学した18歳から23、4歳までの学生を「一般学生」と呼ぶことにする<sup>(注1)</sup>。この若い一般学生からみた本学の環境は特殊なものであろう。本学は非常に小規模な大学であるため、学生数に占めるシニア学生の割合は、学科や年度によっては10%近くに達することもある。教室で、ゼミ室で、クラブ活動で、隣にいる学生の10人に1人は自分の親よりも年上だという状況は、全国的にもおそらく例がないものだ。こうした中、本学の一般学生は、シニア学生とどう付き合い、そこから何を得ているのだろうか。

本学のように高い割合でシニア学生が混在している大学が他にないためか、生涯学習についての研究の中でも、シニア学生と若い学生の関係や影響関係について調査・言及したものは、ほとんどみかけることがない<sup>(注2)</sup>。だがこの状況は、大学における生涯教育が今後本格化していけば、やがて他大学でも必然的に生じていくものである。

そこで本稿では、本学が図らずも先取りしているシニア学生が多いこの環境下で、一般学生がシニア学生とどのような関係を作っているのか、またシニア学生がいるこの環境から何を得ているのかを、一般学生へのインタビューを通じて明らかにしていこうと思う。

## 2. インタビューについて

今回、若い一般学生の代表としてインタビューに応じてくれたFさんは、成績優秀で明朗な女子学生である。2015年春に本学を卒業し、現在は他大学の大学院で勉強を続けている。

Fさんへのインタビューは、本稿後半の「資料」に記載してある。インタビュアー（行木）とのやり取りもできる限りそのまま記載した<sup>(注3)</sup>。

Fさんの話の中にしばしば登場するシニア学生の「Eさん」とは、2013年の論文（飯嶋・行木2013）でインタビューをおこなった5人のシニア学生の中の一人、Eさん（男性・60歳代）のことである<sup>(注4)</sup>。ふたりは同じ学年、同じ心理学のゼミであり、またサークル（華道部）でも共に活動していた。

このようにFさんは、Eさんを中心とするシニア学生たちと接触の機会が多い学生であり、そのため多くのエピソードが聞けることを期待して、我々は彼女をインタビュー対象に選んだ。ただ、今回Fさんに詳しく話を聞いてみると、シニア学生とは「同年代の友達と変わらないくらい」付き合いがあり（インタビュー中の下線部①）、実際Eさんらにはしばしば飲み連れて行ってもらっていた（下線部②③）とのことである。シニア学生との関係が親密すぎるという点で、Fさんはサンプルとするにはやや例外的な学生だったかもしれない。

## 3. シニア学生と一般学生の親交関係

Fさんによれば、一般学生のうち、シニアと雑談をする程度に親しい学生は三割、用事があれば話しかける学生は五割、残り二割の学生はシニアとは接触がないとのことである（下線部⑬）。この数字は、筆者たちの印象よりやや多かった。

親子以上に歳の離れた関係で、どのような雑談をしているのかは興味のあるところである。

Fさんによれば「授業なんかの情報交換して、授業のグチって、他の学生へのグチもあればちょっと言って、お互いの最近あったことなんか言って、その最近あったことのグチを言った次くらいに、人生の教訓がぼろっと出てくるって感じ」(下線部⑧)だそうである。どれも同じ学生であることを立脚点とした話題である。つまり学生というペルソナが、歳の差を埋め合わせる関係性の出発点になっていることがわかる。そして、同じ学生として親密さを確認した上で、はじめて「人生の教訓」が「ぼろっと出てくる」。つまり年上／年下としての関係性が自然に現れる。

この順番を誤り、最初から年上／年下としての関係で接しようとする、シニア学生に好意的なFさんであっても「同じ学生なのに」「上から目線」という否定的な反応(下線部⑥)になってしまう。やはり一般学生とシニア学生との関係には、親密さと敬意の組み合わせに独特なものがあるようである。この点については6章で詳述する。

筆者(飯嶋)がシニア学生と話しているのは、シニア学生は1年次の時は若い学生というひとくくりで一般学生を捉えているが、授業などで若い学生と一緒に過ごす中で、学年が上がり若い学生一人ひとりの姿が見えてきて、Y君は深夜アルバイトをしているためよく授業中に寝ているとか学生の事情などを知ることなどを通して、学生への理解が深まり、年は離れていても「友人」となっていくようである。

シニア学生の観点としても、若い学生もシニア学生も同じ学生という立場であることを立脚点に、若い学生をひとくくりとしてとらえないことから関係を作っていくことの重要性を指摘しておきたい(注5)。

## 4. 一般学生に与える影響

シニア学生の存在は、本学の一般学生にどのような影響を与えているのだろうか。普段の教室での印象から予想していた以下の4点を、Fさんへのインタビューと照らし合わせながら検討していきたい。

### 4-1. 学習意欲の向上

日常的に目にする光景であるが、学業に熱心なシニア学生と一緒に授業やゼミを受けることで、一般学生も「つられて授業参加してしまう」、つまり学習意欲が自然な形で向上する効果がある。この点を一般学生の経験からも確認しようとして、幾度か質問をしているのだが、対するFさんの反応はいまひとつであった。これはそもそもFさんが真面目な学生であり、シニア学生がいるからといって授業態度が変わるようなことがなかったためかもしれない。ただ、下線部⑦にあるように、親しくなったシニア学生との交流の中で一定の刺激を受けていることは確認できる。

### 4-2. 直接的な学習指導や支援

シニア学生がいることで生じる学習意欲の向上は、内発的なものだけでなく、もっと直

接的な形、たとえば欠席や遅刻の多い一般学生をシニア学生が注意したり、欠席した分の授業の内容を、シニア学生が教えてくれたりという形でも生じる（下線部④、⑤）。かつてのシニア学生へのインタビューで、Bさんも、

英語の授業では、私に聞いてくる若い学生がいます。私に聞くなと（笑）

と話しており（注6）、シニア学生が若い学生から頼られていることがわかる。

ただ、若い一般学生への注意や指導は、それが年上／年下の関係を前面に出したものになってしまうと、3で述べたように「同じ学生なのに」という反発を引き起こしてしまう。大学は全員が学生として横並びになった場なののだが、職場での上下関係に慣れてきたシニア層には、つい上から目線で若い一般学生に接してしまうのかもしれない。その点で、一般学生への注意や指導が上手だったEさんが、かつてのインタビュー（注7）で語っていた次の言葉は参考になる。

〔若い学生には〕一緒にお昼を食べるような学生もいる一方で、こちらから挨拶しても返事もしない子もいます。しかし挨拶し続ければ、たいていは徐々に挨拶も返すようになり、会話もするようになります。世間では「最近の若者は礼儀を知らない」と批判していますが、実際に接している私の印象では、多くの場合は、単に歳の離れた人との会話に慣れていないだけではないかと思います。別にその子を変えてやろうなんていう使命感があつてのことではないですよ。無視されても挨拶し続けるのは、社会でずっとやってきて、面識がある人には挨拶するのが当たり前だと思うからやっているだけです。別に苦ではありません。

このようにEさんは、「若者に礼儀を教えてやろう」などという教育的なスタンスではなく、あくまで「面識がある人なら挨拶するのが当たり前だと思うから」挨拶をするという。だから無視されても怒らない。このように「同じ仲間」という場所に降りてくるシニアに対しては、一般学生も心を開く。3で述べたように、一般学生とシニア学生は、同じ学生というペルソナが、歳の差を埋め合わせる関係性の出発点になっている。そこから始まっているからこそ、Eさんの注意や指導は、同じ学生としての「心配」や「協力」として、若い一般学生からも素直に、また確実に受けとめられてきた。

もちろん、こうした若い学生への指導はシニア学生の義務ではない。Eさんは、

シニア学生は、若い学生の指導をするために来ているわけではありません。私たちの目的は、あくまで自分が学ぶこと。それが結果として、若い学生にも良い影響を与えているなら、それはとてもうれしいことです。

とも話している。若い一般学生への注意や指導は副次的・結果的なものである。何よりもまず自分の勉強を優先していただくべきだし、また同年代のシニア学生との交友関係を優先したいと

いう考えも、まったく正当なものである。

#### 4-3. 就職に関する意識の向上

社会で働いてきた人がシニア学生として身近にいることで、一般学生の就職に関する意欲が向上することも、われわれの期待の中にあった。これに対しFさんは、会社で人事を担当したシニア学生から、就職での面接テクニックや、採用する企業側の視点、就職活動への不安の軽減などが得られたと話している（下線部⑩）。ただFさんは、大学卒業後に就職ではなく大学院進学を選んだこともあり、それが就職意欲の高まりとどのように関連したかは、あまり明確にはわからなかった。

#### 4-4. もうひとつの居場所として

中学校・高等学校と、同世代だけで固まった集団にはうまく適応できなかった学生が、シニア学生とはうまく付き合える、シニア学生がいる教室ではうまくやっていると、という事例も、本学では何度もみてきたものである。これについてはFさんも、筆者がたずねる前に自分から語りだしている（下線部⑱）。同世代どうしの馴れ合いが苦手な学生にとって、シニア学生はもうひとつの居場所として、あるいは同調圧力を破壊してくれる異分子として、大きな意味を持っているようである。

#### 4-5. その他

シニア学生が一般学生に与える影響として、あらかじめ想定していた以上4点のほかに、Fさんが「シニア学生がいてくれてよかったと思う点」として語ってくれたものが、以下4つある。

第一に、年上の人との付き合い方を学べるという点である（下線部⑭）。この点については5章で詳しく述べる。

第二に地元のお店に詳しになれるという点である（下線部⑮）。本学の位置する神戸・元町にはスイーツから中華料理、飲み屋まで多くの飲食店があるが、現在の若者たちには未知の店に気楽に飛び込めるような金銭的余裕はなく、どうしても行き慣れたチェーンの居酒屋の方を選んでしまう。新旧のお店についての知識を持ち、積極的に話題店を訪れたりもしているのはむしろシニア層である。こうした知識の断絶は地域経済の将来にとって好ましいものではないが、シニアと若者が同じ学生として交流する本学では、その継承がうまく行なわれているようである。これはシニア学生制度の意外な効果である。

第三に、若いうちにこれをしておきなさいというアドバイスを、親のような命令口調ではなく、自身の経験から語ってくれる点である（下線部⑯）。下線部⑦にもあるように、シニア学生とは、まさにそのような経験や思いがあったために50歳を超えて大学に入学することを決意した人たちのだから、これは説得力があるだろう。

第四に、シニア学生の30歳代の息子、娘の話が、自分の十年後のヒントになって面白いとい

う点である(下線部⑰)。若い一般学生は、自分がどうやって経済的に自立するか、それも景気の良かった昔ではなく、現在の状況下でどう自立できるかに切実な関心を持っている。これに対しシニア学生は、自分の子供が経済的に自立したことを機に入学を考えた方が多い。つまり若い学生が求める事例を、まさに身近に知る方々である。この第四の指摘は、傍からは意外に思えるが、若い学生からみれば大きな意味があるものだろう。

## 5. 年上の人との付き合い方

「4-5. シニア学生がいてくれてよかったと思う点」のうち、第一の「年上の人との付き合い方を学べる」という点について、Fさんは「同じ歳だけがかたまってるのは学校の中にいる間だけで、社会に出た後は自分より年上の人たちばかりじゃないですか。そういうときに、年上の人との付き合い方を知ってるかどうかは、すごく大きいと思います」(下線部⑱)と述べている。

面白いことに、ほぼ同じことを、シニア学生の側も語っている。2013年のインタビューでシニア学生Aさんは、以下のように述べている(注8)。

社会に出たら、年の離れた人と会話する方が普通になるのだから、それがうまくできないと困ります。その点で神戸山手大学の若い学生は、われわれシニアがいることで、他の大学では学べないことを学べているのかもしれない。

年上の人との付き合い方の勘所を、Fさんは「一に敬語、二に敬語」と語っている(下線部⑲)。また、下線部⑲では、シニア学生とうまく付き合えない学生の特徴として、初対面でききなり馴れ馴れしい口調で話しかけてしまう、つまり敬語が使えないことを挙げている。

Fさんがいうところの「敬語」であるが、下線部⑲では「どういえばケンカにならないで、自分の考えを相手に伝えられるか。そこで必要なのが」敬語だと述べている。「『うぜえよー』とか『うるせえよー』とか、そんなのは丁寧か乱暴か以前に、言葉が少なすぎて何にも相手に伝わらない」(下線部⑳)というFさんは、「敬語」という言葉に、ですます調の口調以上のものを含意しているようである。すなわち、同じ世代の中であれば、同じ文化の共有を前提として、断片的・定型的な感情表現を投げあうだけのコミュニケーションで意思疎通ができたかもしれないが、違う世代、違う文化の人たちに対しては、なぜ自分はそう思うのか、一からすべて論理立てて説明しなければならない。同様に相手の言葉も、すべて丁寧に聞き取らねばならないだろう。それが異なる世代の存在を尊重するということであり、Fさんがいうところの「敬語」なのであろう。

コミュニケーションを親密にとるための、手段としての敬意と言い換えてもよい。親密さと敬意をこのように共存させることが、Fさんのいう「年上の人との付き合い方」にあたる。それに対して、前述したシニアとうまく付き合えない学生たちは、親密さと敬意を対立する概念としてとらえているのかもしれない。そのために相手への親密さを、意図的に敬意を差し引い

た馴れ馴れしい態度としてしか表現できないのではないか。

また、シニア学生とうまく付き合っている一般学生の特徴として、祖父母と同居していた経験があるかどうかは一定程度影響を与えている可能性がある。2013年のインタビューでシニア学生Aさんはこう述べている<sup>(注9)</sup>。

若い人でも話しやすい子と話にくい子がいるが、話しやすい子というのは、聞くとたいいおじいさんおばあさんがいる二世帯家族の子。核家族化の影響が、そんな面で現れているのは興味深いですね。友人が自分の会社で就職の面接をした時も、同じような印象を持ったとっていました。

Fさんも祖父母との同居経験があり、同様のことを述べている(下線部⑫)。逆にシニアが話しにくさを感じる学生、いきなり馴れ馴れしい態度をとってくる学生というのは、核家族で育ち、年上の存在が両親か学校の先生くらいしか周囲にいなかった学生なのではないかと考えられる。

親密さと敬意をうまく組み合わせる年上の人と付き合う。確かにそれは、同世代だけでかためられた中学・高校や、核家族化した家庭では身につけにくいスキルである。そしてそれにもかかわらず、多様な年齢層の人々で構成された社会に出るためには不可欠なスキルでもある。年上の人とのつきあい方は、社会に出る前にどこかで意識的に学ばねばならない。Fさんがそのことを、シニア学生がいる環境の利点として一番に挙げたのは、ある意味で必然なのかもしれない。

## 6. まとめ

若い一般学生は、シニア学生とどう付き合い、そこから何を得ているのか。この点を明らかにするために、本研究では一般学生へのインタビューをおこなった。

まず、シニア学生が存在する環境から一般学生が得ているものについてであるが、この点について、筆者らが予想していた学習意欲や就職意欲の向上は、今回ははっきりとは確認できなかった。インタビュー対象であるFさんが、もともと学習意欲の高い学生であったこと、就職ではなく大学院進学を選択した学生であったことが理由である。ただし、親しくなったシニア学生との会話の中から、自分の人生について考えるきっかけを得ていることは、Fさんも繰り返し強調していた。また、同年代だけでかためられた中学・高校の教室に息苦しさを感じてきた学生にとって、シニア学生の存在がその息苦しさに風穴をあける、大きな手助けになっているという予想は、Fさんも強く同意するところであった。

我々が予想していなかった点として、Fさんは「年上の人との付き合い方が学べる」ことを強く主張していた。「年上の人との付き合い方」の勘所として、Fさんが「敬語」という言い方で述べていたものは、隔絶した世代間でのコミュニケーションを成立させるため、一からすべて丁寧に話す／聞くという態度、つまり親密さと敬意の共存であった。同じ世代間での断片的な感情表現を投げるだけのコミュニケーションに慣れた世代は、年上の人との付き合い方、つ

まり親密さと敬意をうまく共存させる方法を、意識的に学ぶ必要がある。それが学べることが、シニア学生がいる環境から得られた最大の利点だという。

次に、一般学生とシニア学生の付き合い方についてだが、Fさんのようにシニア学生とうまく付き合ってきた一般学生は、それが離れた世代間での異文化コミュニケーションであることをしっかり意識しているようである。すなわち上述の「一からすべて丁寧に話す／聞く」という態度である。丁寧に聞き、話すというのは、相手への敬意であり、またそれを基点に親密さを作る作業である。この感覚がつかめず、親密さを敬意の除去としてしか表現できない学生は、シニア学生からみると「馴れ馴れしい学生」にしか映らず、コミュニケーションに失敗する。このように一般学生からシニア学生へのアプローチは、敬意が基点として重要である。

逆に、シニア学生から若い一般学生へのアプローチでは親密さが基点となる。Eさんのように、若者とうまく付き合ってきたシニア学生は、同じ学生であることをまずは強調（親密さ）する。そのため、Eさんの言葉は、同じ学生としての「心配」や「協力」というかたちで、若い学生にきちんと届くものになる。逆に歳の差から関係を始めようとすると、若い学生には「上から目線」「敬意の強要」という悪印象しか与えない。貴重なシニア層の人生経験やシニア入学にまで至った思いが、これでは無駄になってしまう。

このように歳の離れた学生間では、「同じ学生であること」「歳の差があること」、つまり親密さと敬意という二つの要素を、手段としてうまく使い分けた、独特のコミュニケーションが必要になる。本学のようにシニア学生の比率が大きい環境では、実際にそれが、自然発生的に定着しつつあるようだ。

もちろん本稿でインタビューした一般学生はひとりであり、それだけで結論を出せることは少ないが、生涯学習が若い一般学生に与える影響という、これまであまり言及がなかった状況について、研究の可能性があることは示せたかと思う。この先、生涯学習がより進展し、大学での生涯教育が一層本格化していけば、それが若い学生に与える影響は、他大学でも前面化していくはずである。そこでは状況のより詳細な分析と同時に、その影響をできるだけ建設的な方向、たとえば若い世代が、「年上の人との付き合い方」を学ぶ機会にしていけるような教育実践のありかたまでが、議論として必要になるだろう。

## 注

注1. 本稿でいう「一般学生」を「伝統的學生」、シニア学生のような学生を「非伝統的學生」ともいう（小池 2002 : 57）。

注2. 生涯学習の促進によりシニア世代の学生が入学してくることが、若い一般学生にどのような影響を及ぼすのかについて、既存の論文や政府指針に言及個所を探すことは難しい。たとえば『文部科学白書』は「生涯学習社会の実現」という章に大きなページを割いているが、一般学生への影響については何も言及がない。『新・生涯学習論』（蘭田・永野 2002）における一般学生への言及は、170ページ中「教員の工夫次第では、若い学生と社会人の対話を促進し、意欲のある学習集団を作ること也不可能ではない (ibid. : 153)」という一文だけであった。ネット上の「生涯研究 e 辞典」も、検索ワードを工夫したが、一般学生への影響を含んだ項目を見つけることはできなかった。他大学で



はまだシニア学生の割合が少なすぎて、一般学生への影響を考える段階にもないし、状況も観察できないということなのだろうか。

注3. インタビューの中で語られた言葉は、そこまでの対話の流れが異なれば、あるいはインタビュアーや同席者が異なれば、また違ったものになった可能性がある。そのためインタビューで語られた言葉は、それだけを切り出して資料化する前に、彼にその時その場でそのような言葉を語らせたものは何か、その暗黙の前提まで考慮に入れる必要がある（ラングネス&フランク 1993: chap.2）。そのため今回は、インタビュアー側の質問まで含めて、その全文を取録することにした。

注4. 2013年の研究（飯嶋・行木 2013）におけるインタビューは以下の通りである。

・実施時期：2013年8月

・インタビュアー：行木敬、飯嶋香織

・インタビュー1

Aさん：卒業生（1期生）、男性、60歳代、会社員を定年退職後入学

Bさん：卒業生（1期生）、女性、60歳代、公務員を定年退職後入学

・インタビュー2

Cさん：在學生（4年）、女性、60歳代、会社員を定年退職後入学

Dさん：在學生（4年）、女性、60歳代、会社員を定年退職後入学

・インタビュー3

Eさん：在學生（3年）、男性、60歳代、会社員を定年退職後入学

（データは全て2013年9月現在）

注5. 言うまでもないことだが、本学に入学したシニア学生全員に若い一般学生と親しくなることを期待しているわけではない。シニア学生の中には、同世代の友人関係を重視している方、職場での人間関係に苦勞してきたので大学では静かに勉強に集中したいと希望を持っている方などさまざまである。

注6. この言葉は、2013年のインタビュー（注4参照）で得られたものだが、2013年の論文（飯嶋・行木 2013）は紙数の都合でインタビューのごく一部しか引用していない。この言葉も、今回が初出となる。2013年のインタビューは、その全文をいずれ何らかの形で発表したいと考えている。

注7. 注6を参照。

注8. 注6を参照。

注9. 注6を参照。

## 参考文献

飯嶋香織・行木敬、2013「生涯学習におけるシニア大学生の学びのニーズ —神戸山手大学のシニア学生を対象にした調査結果から」『神戸山手大学紀要』vol.15

飯嶋香織・行木敬、2014「生涯学習におけるシニア大学生の現状と課題 —神戸山手大学のシニア学生を対象にした質問紙調査の結果から」『神戸山手大学紀要』vol.16

小池源吾、2002「非伝統的学生の特性と学習スタイル」『日本社会教育学紀要』vol.38

蘭田碩哉・永野俊雄、2002『新・生涯学習論』ヘルスシステム研究所

文部科学省、2015『平成26年度 文部科学白書』

L. L. ラングネス & G. フランク、1993『ライフヒストリー研究入門 —伝記への人類学的アプローチ』（米山俊直・小林多寿子訳）ミネルヴァ書房

### 資料：一般学生へのインタビュー（2015年3月実施）

- ・インタビュー対象：Fさん（女性、20歳代）
- ・インタビュアー：行木敬
- ・実施時期：2015年3月

[－] Fさん自身は、シニアとどのような場でつきあいがありましたか？

[F] まずはゼミや授業です。自分が休んだら「おい、この前はどうしたんや」みたいに声かけていただいて、そこから友達になった人もいました。特に私は教職も取っていて、シニアの方も熱心にやられていて。もう、①同年代の友達と変わらないくらい付き合いありますね（笑）。それとクラブです。私は茶道部と華道部に入っていましたが、茶道部にはシニアの方がたくさんいました。華道部に入ったきっかけも、知り合いのシニアの女性に誘われたからでした。あとは②授業の後、たとえば四限で終わった日なんかは、「じゃあ飲みにいこうか」なんて感じで、食べに行ったりもしました（笑）。

[－] シニア学生の方と飲みに行くことは結構あったんですか？

[F] 私は……ありましたね（笑）。③私と、もうひとり女の子と。シニアの人も2人で。それはEさんなんですけど、「若い学生に払わせられるか」なんていっておごってくれたり。男気ありますね（笑）。ありがたかったです。

[－] ゼミは、シニアの方が一緒だと変わりますか？

[F] 2年生の時の観光学のゼミで、神戸の観光案内の企画を作った時は、神戸の地理や名所をよく知っていて、ゼミを引っ張ってくれました。3、4年では心理学にゼミを移したのですが、議論をするうちに話が取り留めなく広がってしまっても、「まあこういうことやんなー」とうまく話をまとめてくれたり、本筋に戻ってくれたりしました。

[－] 普通の授業ではどうでしたか？

[F] ④遅刻したりすると「なんで遅刻したんや」と声をかけてくれて、「最初のところ、こんなやつたぞ」って教えてくれたり、頼りになりました。いや、でも逆もあるんですよ（笑）。X先生の授業なんかでシニアの方が休んだ時は、「前どうやった」って聞かれて、こうでしたって答えたり。レジメをもらっておいて、それを渡したり。あと、シニアの方は、たいてい前の方に座っているので、「あー、なんかめっちゃやる気あるなー」なんて思いますね。

[－] それに刺激を受けたりはしましたか？

[F] ⑤シニアの方と親しくなると、寝てたりすると怒られるので、寝ないようにしようなんて、そんなのはあるんですけど。そうですね、刺激。いやがんばろうと、私は思いました。

[－] クラブではどうでしたか？

[F] 私の所属する茶道部では、外部から裏千家の先生を呼んでいたのですが、その先生がシニアの学生を頼りにしていました。あれ、部長は私なのに、みたいな（笑）。

[－] 普通の友達とシニアの方では、やはり付き合い方は違う？

[F] クラブの内容にもよると思います。わーっと派手なサークルならわかりませんが、私の所属していた華道部や茶道部なんかでは、シニアの人との距離感が難しいとかは、私は思わなかった。……あ、ただ友達で書道部の女の子は、シニアの方が結構パーといってくるってあって、へこんでました。

[－] そういうことを聞いたのは、シニア学生の存在に若い学生がとまどうんじゃないかということ、僕ら教員は心配していて。シニアの方と同じ学生として付き合うというのは、高校まではなかったことじゃないですか。大学でシニア学生という存在に出会って、同じ学生として付き合えたのか、それともたとえば、先生の一つのような見方をしたのか。そのあたりの距離感が知りたくて。

[F] あー、そういわれれば、入学したすぐの時は少しとまどったような……昔の記憶が……（笑）

[－] じゃあ、こういう風に聞き直しましょうか。Fさんがうちの大学に入って、最初にシニア学生と話したのは、どんな場面で、どんなきっかけでしたか？

- [F] 一番最初は……確か英語の授業でした。外国人の先生がやってくくださる授業で、グループになって、その全員と英語で話さなければならない課題があって。そこではじめて会話しました。
- [－] じゃあ最初の会話は英語だったんだ(笑)
- [F] はい。で、その後の休み時間に、今の授業大変やったなーみたいな話をして。
- [－] その時、年上の人ということで緊張したりしましたか？
- [F] いや、あんまり思わなかったです。相手のシニアの方がとてもフレンドリーな方で。⑥あ、でも、シニアの中には、言葉悪いんですけど、なんというか「上から目線」な人もいて……。この学校に来たら、みんな同じ学生じゃないのか、仲間じゃないのか、みたいに思うこともありました。年上だから尊敬しろよ、みたいな威圧をかけても、いや知らんがな、みたいな。上から目線で来て、若い生徒はなっとらん、みたいな。いや、みんな生徒なんだから、対等でしょ、みたいな。
- [－] 最初の授業で出会った方はそうではなく……？
- [F] そう、その方は、もう英語は何十年も前やし、高校出てすぐ働いたから、全然覚えてないし、みたいな、すごく謙虚な感じで……。私の周りは、そういう謙虚な感じの人が多かったので、こちらも謙虚に、素直になれて。でも、まあ、そうではない方もいて。
- [－] まあ、シニアの人と一口にいっても、いろいろな人がいるからね。君たち世代も、もちろんいろいろな人はいるけど、同じ年に中学出て、同じ年に高校を出て、年齢も同じくらい、そこは変わらない。けど、シニアの人は年の差だけでも30年くらいあるし、会社で働いていた人、自営業、主婦、いろんなことをしてきた人が入ってくるからね。本当にいろいろ。
- [F] シニアの人同士でさえ、意見が合わず、ギスギスすることがあるって聞いてます。
- [－] それは……小耳にはさむね(笑)。そこは掘り下げないようにして(笑)、では英会話の時間にファーストコンタクトしたシニアの方とは、その後、別の授業や休み時間、放課後などにも話をしていくようになったわけですか？
- [F] そうですね、徐々に……。授業の前、シニアの方は、たいてい早くから教室に座っているので、そんな時に「あ、この前の……」みたいな感じで。最初は「おはようございまーす」って挨拶くらいだったんですが、徐々に雑談もするようになって……。
- [－] 君たちとシニアの人って、年の差が、少なくとも30歳、多ければ40歳以上あるわけだけれども、どんな内容の雑談をするんだろう？
- [F] 最初は授業の内容のことで……。親しくなってきたら今度は授業に対するグチとか(笑)、お互いもっと個人的な話題になって……。
- [－] それは、たとえばシニアの人の人生経験というか、「昔こんなことをしていてねえ」みたいな話？
- [F] ああ、聞きましたねえ。
- [－] そんな中で、Fさんにとって参考になったような話というの多いのかな？
- [F] あー、ありましたよ、いろいろ。⑦それと、若い時は何でもチャレンジしておけど。タイミングを逃すと、後になって絶対後悔するからって。実際、今になって大学に来たのは、その後悔からだって方もいますし……。そうそう、「君は親に大学行かせてもらってんねんぞ、感謝せい」みたいなことを、親に代わって言われたり(笑)。
- [－] ああ。
- [F] ⑧授業なんかの情報交換して、授業のグチいって、他の学生へのグチもあればちょっと言って、お互いの最近あったことなんか言って、その最近あったことのグチを言った次くらいに、人生の教訓がぼろっと出てくるって感じです。
- [－] しかしグチ多いな(笑)。
- [F] いろんなことを聞きました。たとえば、人の好き嫌いを「その人のことをよく知らないうちにしてはあかんねんで」とか。「若い人は、そんなんすぐしてまうけど、社会に出てからそんなんばっかしてたら自分が狭くなるだけやから」って。「絶対そんなんはやめとけよ」みたいな。

[－] あー、いいこというねえ。

[F] あと、ゼミに留学生の女の子が二人いて、その一人は在学中から貿易の会社にかかわっていて、卒業後も続けるって人なんですけど、そういう子にも仕事のアドバイスをいろいろしていたみたいです。もう一人の女の子は、日本でこれから大学院に行くんですが、その子には勉強のこと……いや(笑)、その子、彼氏がいて、いろいろと、なんというか破天荒なエピソードを語るんですが、その子にも「そんな男やめときー」みたいなアドバイスを(笑)。で、「君はバーっとしゃべる子だから、彼氏は君の話を静かに聴いてくれるやつが良いぞ」みたいにいってたら、本当にそういう男の人と付き合い始めて……(笑)。「ほら、わしのいった通りになった」みたいな(笑)。

[－] じゃあ逆に、シニアの人が言っていたことの中で、これは私にはピンと来なかった、みたいなことってありますか？ それって今の時代とはズレてんじゃないのかなあ、みたいな。

[F] いや、たいていのことは理にかなってて、そういうのは私はなかったです。私の身の回りにいたシニアの人は、みんな話が分かる人ばかりで……。ラッキーだったのかもしれない。シニアの中には、なんというか、ちょっと怖いなああって方もいて。授業中に先生に食ってかかったり。

[－] 食ってかかる？

[F] 使っている資料が古いとか、そういうことを授業中に言うわけですが。もちろん正しい指摘ではあるんですが、でもそこまでいうかなあって、やっぱり私なんかは思ってしまったって……。勉強熱心なのは分かるんですけど、授業中にそういうことをいうのはちょっと行き過ぎかなあって。

[－] いや、でも、教員の立場からすれば、そういうことは遠慮せず言ってもらった方がいいんだよ。次から修正できるし、あるいは「学生はこういうところに疑問を覚えてひっかかるのか」というのも分かるし。反応があるほうが、授業やってるって感じもあるし。

[F] そうなんですか。じゃあこれは、世代間のギャップなのかもしれませんね。私たちの世代は、授業中に声や音を立てたら叱られる、授業は静かに聴くものだって、ずっと叩き込まれてきてるから。

[－] 昼休みにおしゃべりしてる学生が、みんな片手にスマホ持って、それぞれ別の友達とLINEしてたりするじゃない？ で、それでもそれは別に相手に失礼でもないし、おしゃべりにも集中しているというなら、やっぱり「集中」とか「失礼」とかの基準が、今の若者世代はかなり変わってきてるよね。……そうか、それだとシニアの人が「授業中はスマホしまえよ」なんて注意しても、何で注意されるのか、なかなか通じないかもしれないなあ。

[F] うーん、たしかに。……あ、でも、世代ですべて片付けるのも問題かもしれない。というのは、⑨あるシニアの方が、自分のクラブに若い学生が入らないという悩みをおっしゃってたことがあって、そこまではいいんですが、そのことを、山手の若者はクラブ活動への参加率が低い、士気が低い、みたいな話に広げて語るんですね。それは違うかなと。私も、自分の部にも人がなかなか入らなかったけど、だったら勧誘を工夫しようとか、アピールできる成果をあげようとか、そういう方向でがんばりました。世代で切って、若者を悪者にしても文句をいっても、何も解決しないだろうと。

[－] なるほど……。ところで、シニアという、これまで社会で働いてきた人たちが学生として身近にいるという環境は、君達若い学生にも、たとえば就職に関する意識なんかには、影響を与えたりしてるのかな？

[F] あー、⑩Kさんに「就職決まらなかつたらいいトコ紹介してあげるよ」っていわれて心落ち着けたりとか(笑)。あと、Eさんは人事もされていたことがあるそうで、生々しい話もききました。「採用はバクチャ」って(笑)。10分、20分の面接で判断しなきゃいけないから、採用した後で「失敗したー！」ってこともよくあったって(笑)。でも逆に学生の立場からいえば、その10分、20分の面接を乗り切ればいいだけだと。そういわれて気が楽になりました(笑)。それに、学歴がどうか、資格が一個多いとか少ないとか、そんなことは採用する側からみたらたいした違いじゃないと。決め手になるのはやっぱり、ちゃんとコミュニケーションとれて、これからずっと一緒に仕事ができるやつかどうかだと。

[－] Fさんは、シニアの人とはいい関係で、知り合いも多かったけど、そうでない学生もいるよね。その違いは何だろう？

[F] ①それは……敬語が使えるかどうかです(笑)。もちろん、慣れてきたら普通のしゃべり方になってもいいと思うけど、学生の中には、初対面のシニアにいきなり友達みたいに話しかけてしまう人がいる。悪気はないというか、むしろ親しみのあらわれなのかもしれないけど、初対面の年上の人にいきなり馴れ馴れしく話すというのはシニア世代の人たちにはない感覚なので、失礼とかの前に、まず驚いて引いてしまう。そうすると学生の方も、あ、自分、引かれてる、というのがわかるから、そのシニアにはもう話しかけなくなっちゃう。

[－] ふーん。……ひょっとしてFさんって、おじいさんやおばあさんが身近にいたの？

[F] あ、一緒に住んでました。今はもう、ふたりとも亡くなりましたが。

[－] あるシニアの人が言ってただけど、話しやすい学生っていうのは、たずねるとだいたいおじいさん、おばあさんと一緒に住んでいるんだって。

[F] ②あー、いわれてみるとそうかもしれない。I君もそうだし、Aちゃんもそうだし、Hさんもよくシニアの人と話してますが、おばあちゃんと一緒に暮らしてますね。シニアの人たちは、もちろんおじいちゃん、おばあちゃん世代よりは若いんだけど、両親よりは年上ですよ。その世代と話をするのに、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に暮らしているっていうのは、やっぱり大きいと思う。あまり抵抗感がないというか。逆に核家族で育ってきたら……どうなるんだろう？

[－] 年上というと、親か学校の先生しかいない環境で育ってきたわけだから、大学でいきなりシニアと出会っても、親しさと敬語の混ぜ方というか、距離のとり方がわからなくなるのかな、やっぱり。

[F] そうということなのかも。

[－] それは逆もいえるかもね。シニアの人たちにとって、それまで付き合いのあった若者というのは自分の息子や娘なわけで、そうすると、あれしろ、これしろと、上から命令というか、しつけする、教育する関係だったわけじゃない？ なので、いまこの大学で若い人と一緒になったときも、同じ学生としてじゃなく、あれしろ、これしろと、つつい上から目線でものをいってしまう人も出てくる。

[F] あー、だから、さっきの「自分の部に若者が入らない、やる気がない、士気が低い」っていうのも、なんか自分の子供をしかるような言葉ですよ。同年代の学生どうしだったら、出てこない言葉というか。

[－] そう、だからちょっと上から目線のシニアがいたとしても、それは「年上だから敬え」みたいなことじゃなくて……これまで自分の子供に対してしてきたしつけや教育の延長線でいく以外に、若い学生との付き合い方をしらない、わからないということなんだろうね。シニアの人たちも、若い学生との付き合い方や距離の取り方を、いろいろと模索中なんだよ。

[F] そう思うと、多少の上から目線は許せますね(笑)。

[－] その言葉が上から目線だよ(笑)。ところでシニア学生とよく話す学生っていうのは、若い学生の何割くらいなんだろう？

[F] ③雑談もするくらいに親しくしている学生は三割くらいです。授業関連で用事があれば話しかけるっていう学生は五割くらいかな。で、残り一割か二割の学生は、まったくシニアとはからまないですね。

[－] 授業の後に、若い学生がシニアの人に話しかけている光景をみかけます。たぶん試験範囲を聞いたり、休んだ回のレジメのコピーをお願いしたりしてるのかな。そういう人が「用事があれば話しかける」って人ですか？

[F] そうです。で、そういうこともしない学生が、残り一割か二割。まあ、Eさんあたりは、そういう学生にもガンガン声かけていきますけど(笑)

[－] 後輩に、シニアとうまく付き合うにはこういうことに気をつけたらいいですよとか、シニアと付き合うとこういういいことがありますよとか、そういうメッセージはありますか？

[F] ⑭まずいいことは、年上の人との付き合い方がよくわかるってことですね。同じ歳だけでかたまっ  
てられるのは学校の中にいる間だけで、社会に出た後は自分より年上の人たちばかりじゃないです  
か。そういうときに、年上の人との付き合い方を知ってるかどうかは、すごく大きいと思います。た  
とえば年上に対して、こう主張したい時には、こういう言い方をしちゃいけないんだ、こういう言い  
方をすればいいんだ、なんてことが、シニアの人たちと付き合うとめっちゃくちゃよくわかります(笑)。  
これは絶対いいと思います。

⑮あとは……女性にせよ男性にせよ、いっぱい地元のお店知ってるんで、あつという間に神戸に詳しく  
なれます(笑)。

⑯あと、「若い時、ああしておけばよかった、こうしておけばよかった」というのを語ってくださる方  
が多い。「後悔するから、いまこうしとき」というのを聞けるのは、ありがたいんじゃないでしょう  
か。親も「こうしとき、ああしとき」とはいうけど、命令口調。シニアの人は、自分の経験から話し  
てくれるので、リアリティがあるというか、すっと入りやすいというか。

⑰あとは……シニアの方、本人の経験だけでなく、その息子さん、娘さんがいま30歳代という方が多  
いんですが、その人たちが会社で今こうだとか、子供生まれてこうだ、なんて話も面白いですね。自  
分の十年後のヒントになるので。

⑱それと……小中高だと、同じ歳どうしのせまい考え方で価値基準みたいのがあって、それを守る  
ことでグループができたり、そんなのばかばかしいって無視するといじめられたり、そんなのがある  
んですけど、教室にシニアの方がいるせいか、大学ではそういうのがなくなりますね。それはとても  
いいですね。

[－] グループ作りの基準になっている価値観の、せまさとか、子供っぽさが、年齢も経験も価値観も違  
うシニアが同じ教室にいることで暴露されちゃう、成り立たなくなっちゃうってことかな。

[F] そうです。逆に同じ歳しかないと、みんな内心ばかばかしいと思っていても、やめられない、基  
準を守るほかないとか。……シニアがいないと、大学でもそんなの続いてたんですかね？ ゼミ  
なんかでも、シニアがいるおかげで、みんな大人になれたのかも。

[－] ふむ。では、若い学生がシニア学生とうまくつきあうためのコツはなんだろう？

[F] ⑲一に敬語、二に敬語です(笑)。別にシニアだからって遠慮することはないです。変だと思ったこ  
とは変だというべきなんです、その時にどういえばケンカにならないで、自分の考えを相手に伝え  
られるか。そこに必要なのが「敬語」ですよ。だって、ただ怒らせるだけで、いいたいことをわかっ  
てもらえなきゃ、話す意味がないじゃないですか(笑)。

[－] つまり、Fさんの言う「敬語」は、単に丁寧な語尾とかのことではなく、語り方まで含めての敬語  
ですね。相手より強い感情をぶつけて相手を黙らせるんじゃなく、理路整然と話すことで、自分の言  
いたいことをわかってもらうための語り方というか。

[F] ⑳そうです。「うぜえよー」とか「うるせえよー」とか、そんなのは丁寧か乱暴か以前に、言葉が少  
なすぎて何にも相手に伝わらない。シニアの人は、こっちの言いたいことを丁寧に説明すれば、絶対  
にわかってくれますから。「あー、なるほどなあ、それは悪かったなあ」とか。

[－] そのことは、シニアと付き合うコツであると同時に、シニアと付き合っていく中で得られる最大の  
スキルなのかもね。同じ歳同士の集団なら「うぜえよー」「うるせえよー」くらいの言葉で通じること  
も、社会に出て、いろんな立場の人がいる中で仕事をしていくなら、一から全部、きちんと丁寧に説  
明しなきゃならない。それが学べるのがシニア学生がいる環境か。

[F] 成長したんです。シニアの人たちに学んで(笑)。

[－] きれいにまとまったところで、そろそろ終わりにしましょうか。最後に、卒業していくシニアの人  
たちに、何かメッセージはありますか？

[F] Eさん、卒業しても、お互い暇な時はまた飲みに行きましょう！

[－] とのことです。今日はどうもありがとうございました。

(以上)